
俺の楽しい決闘道

ザークシーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の楽しい決闘道

【Nコード】

N1588P

【作者名】

ザークシーズ

【あらすじ】

気がつけば子供。なんで!? どうして!? だれか、だれか助けてよおおお!! なんて気持ちなど持っているはずもなく、なぜかゲームオリジナルのカードがあり、毎回デッキが変わるやもしれぬ。更新は遅いだけでも。

一話 気がつけば（前書き）

二次創作を書くのは初めてですのでどうも上手く書けないです。

……が！それでもいいよん、という寛大な心の持ち主様はお読みください。

けっ、こんな駄文読んだら目が腐るわ！という方、大切な目が腐り落ちる前に戻るボタンをクリックするか、新たなページへ飛ぶか、右上の赤いボタンを押してこの文から脱却してください。

見た目高校生なんだぜ!?

どうすればいいんだ!?! いかん、いかんぞ落ち着け俺!

.....ふう、年甲斐もなく
慌ててしまった。

まず現状確認。

Q ここはどこですか？

A どこかの公園だと思われる。

Q 持ち物はなんですか？

A カバン……の中身はノートと何かの番号札（受験番号003番と書かれている……受験かい）

Q なぜカバンの中に遊戯王カードが入っているのですか？

A きつとこの体の持ち主は不真面目なだろう。

Q なぜデュエルディスクが入っているのですか？

A きつとすごく遊戯王が好きだったんだろう。

Q 貴方は誰ですか？

A ノートには『平杉 椋』と書かれてある。

Q 目の前の大きな建造物はなんですか？

A わかりません、限界です。

……まあ大体理解した。

この体の持ち主は『平杉 椋』といい、遊戯王が好きすぎて受験の日にまで持ってくる愚か者なだろう。

しかし、今日が受験だというのは厳しい。

別に俺が受ける分には問題はないが、『平杉 椋』にも受験の空気というものを味わせなければならぬ。

ホントあの時は周りにいる奴全員が、自分よりはるかに頭が良さそうにみえたからなあ……。

と、そんなことより。

受験の場所はココでいいのか？ まあ目の前にいるんだからそうなんだろうが。

取り敢えず入ってみるか……。

〜@〜

「……………は？」

開けた口が塞がらないとはまさに今の俺の状況だろう。

だって……………だってさ！

思いつきり決闘デュエルしてるんだぜ！？

いやいやいやいや、ちょっと待ってクレヨン。いや落ち着けよ俺。

え？ ……え？ なんなの？ 受験の空気つんたらかんたら言ってた俺がバカみたいじゃないか！

ってそっちではなく。みんな楽しそうだ……でもなく！

「意味が分からん！ どういうことだ!？」

「おい、うつせーぞ……ってなんだあ？ 平杉くんじゃないかあ。よくそんなクスカードでここに来ようと思いましたがね。」

「ああ？ なんだ平杉か。そうだ！ 悪いんだけど、またカードくれね？ いつか返すからさあ。」

なんだ？ どういうことなんだ？

いきなり絡まれたぞ……相手は知ってるみたいだが……少なくとも友人関係ではないな。

こんなの友人にしたくない。

「おいおいおいおい。さつきからダンマリ決め込みやがってよお。トモダチの言ってることが聞こえねえのかあ?」

「まさかの友人だった!!」

おい『平杉 椀』よ……友人くらいは選ばつちや……。

まあ冗談だが。

『え、受験番号1番から4番までの受験者は下に降りてきてください』

番号入ってるよなあ。コイツ等が邪魔で下に行けねえんだけど。

「おい」

「お？　そうそう素直にカードを渡　　ひっ!？」

軽く本当に軽く薄く伸ばした怒りを込めて睨みつけたらビビってやんの。

放っておいて先に行こ。

鏡を見て今の自分の姿を確認してみたんだが、中の中から中の上だった。

最低でもないし見れない顔というわけでもないが、イケメンと聞かれるとそこまでは……となる程度。

ぶっちゃけ普通、平凡、一般的、普遍的、基準点と言われるレベル。

どーでもいいな。

てかもう少し下に着くまでの道を分かりやすくしてほしいものだ。

……フィールドに着いたけどさ。

あらら、先生待たせてた。ちょっと聞きたいことがあるんだが。

〜@〜

「ライフポイントLPは4000。ライフが尽きるかデッキが無くなった状態でドロしたら負けだ。」

……無いと思うがサレンダーも負けとなる。なにか聞きたいことは？」「

「一応確認しますが、ここってデュエルアカデミアの入学試験会場ですか？」

「ああ、そうだが？」

「そうでしたか……なんでなのさグダグダしてなんとなく生きるよりはましだけどさ……」

今衝撃の事実が発覚された。

なんでかマンガの世界に入り込んでしまったようだ。

叫びたくなった俺を許してくれ。

確かに龍とか竜巻とかいろいろあったけどさ！ 認めたくなかったんだよ！

前世（？）でデュエルアカデミアといえば遊戯王GXというアニメの話になる。

しかし、今ではそれが現実となるのだ。

「行くぞ！ 私のターン、ドロー！」

「え！？ ちょ、五枚引いて……っ」と

「つかデッキなんか確認してないぞ！？ てっきり娯楽用だと思ってたんだから！」

……… なんかTFのゲームオリジナルのカードがあるんだが。
タッグフォース

「私は手札から『ロード・オブ・ドラゴン ドラゴンの支配者』を通常召喚する！」

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上に表側表示で存在するドラゴン族モンスターを魔法・罫・効果モンスターの効果の対象にする事はできない！

そして手札から魔法カード『ドラゴンを呼ぶ笛』を発動！

フィールド上に「ロード・オブ・ドラゴン ドラゴンの支配者」
が表側表示で存在する場合、
手札からドラゴン族モンスターを2体まで特殊召喚する！

『トライホーン・ドラゴン』と『密林の黒竜王』を特殊召喚！

2体とも通常モンスターだ。

カードを2枚伏せ、ターンエンドだ。

……大人げなかったか？」

「そりゃそうですよ！ ここからどうやって勝てと!?!」

「はっはっは。まあ頑張れ」

うわーこれはない。

一気に3体召喚され総攻撃力6150。しかも伏せカードが2枚。

……このカードに賭ける！

おい観客！ あいつ終わったなとか言うな！

「俺のターン、ドロー！」

このデッキはバーンデッキのようだ。ゲームオリジナルがあるから

何とか勝てそうだが……。

「手札から魔法カード『大嵐』発動！

フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て破壊する！」

「破壊されたか……が、罠カード『黄金の邪神像』の効果が発動する！」

セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分フィールド上に

「邪神トークン」（悪魔族・闇・星4・攻/守1000）を1体特殊召喚する！

2枚ともそのカードなので守備表示で特殊召喚！」

相手の場に邪神トークンが特殊召喚された。

これで相手は手札なし、魔法・罠ゾーンなし、モンスターゾーン満席となったわけだ。

ラッキー……。

ここから反撃してやる！

「手札から魔法カード『デス・メテオ』発動！

相手ライフに1000ポイントダメージを与える！
相手ライフが3000ポイント以下の場合このカードは発動できない。

……ですが4000ポイントなのでイけますね？」

「くっ……」

魔法カードから巨大な火の玉が出てきて試験官を襲った。

あんなの来たら怖すぎるわ！　っかライフ4000でデス・メテオ入るとかバカだろ？

「で、魔法カード『ご隠居の猛毒薬』を発動！

次の効果から1つを選択して発動する。

自分は1200ポイント回復する。

相手ライフに800ポイントダメージを与える。

俺が選ぶのは、ダメージの方です！」

「むおっ！　ぐ……ぐふっ！」

よぼよぼの爺さんが出てきて試験官に紫色の液体をぶちまけた。

……試験官、これソリットビジョンだよな？

「ここからが本番！ 手札からモンスターカード『マスクド・ナイト LV3』を召喚！」

『なんだあれ。攻撃力たったの1500？ それならさっきのは回復した方が良かったんじゃないか？』

『プレイングミスかもな。なんせあの“平杉 椛”だし』

『ええ！？ あいつがあの“平杉 椛”！？ かなり明るいじゃないか！』

『ああ。オレも最初は見間違いかと思っただけだからな』

『ええええ！？ あれがあんなに明るくなるはずないだろ！？』

『フーかあいつっていつの間にあんなカード手に入れてたんだ？ 全部通常モンスターじゃなかったっけ？』

いつの間にか外野が増えていた。たいして白熱しているとは思わな
いんだがな。

というか全部バニラって……さすがにないだろ、それは。

それよりも試験だ試験！

「マスクド・ナイト LV3の効果発動！」

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に相手ライフに400ポイントダメージを与えることができる。

この効果を発動するターン、このカードは攻撃する事ができない。

というわけでそおいつ！」

そおいつ！ の掛け声に合わせて光線を……って光線！？

ま、まあいい。

「手札から魔法カード『レベルアップ！』を発動！

そのままの意味で、現れよ『マスクド・ナイト LV5』！」

『おお！ 攻撃力2300！』

『へっ、結構盛り上がってるみたいね』

『ええ、あいつすぐ負けると思ってたんですけど って、

天上院 明日香さん！？』

うげ。原作キャラが出てきた。

あんまり会いたくはないんだよね……だって命にかかわるし。

「そしてマスクド・ナイト LV5の効果発動！

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に相手ライフに1000
0ライフポイントダメージを与える事ができる。

この効果を発動するターン、このカードは攻撃する事ができない。

行くぜ、そりゃあ！」

またもや光線だった。しかもウル ラビームのポーズで。

『おおおおおおお！ すげえ！ マスクド・ナイトカッコいい！

』！

『……でも普通に攻撃した方がダメージが多かったんじゃないかし
らっ？』

『……………あ』

うわ、アニメでは弱かったはずなのに妙なところで敏いな、あいつ。

まあ折角だから

「そして最終形態！ 魔法カード『レベルアップ！』発動！

幾多の戦場を越え、最善の手で相手を打ち破る『マスクド・ナイ

ト 『LV7』 降臨!」

「ぐっ……そのモンスターの効果は……?」

試験官の残りライフ。

4000 - 1000 - 800 - 400 - 1000 = 800

「1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に相手ライフに1500ライフポイントダメージを与える事ができる。」

しかも攻撃が可能!」

「攻撃力2900でその効果だ!? なんてデタラメな……」

「いくぞマスクド・ナイト!

バトルフェイズ! ロード・オブ・ドラゴン ドラゴンの支配者に攻撃!」

マスクド・ナイトが手に光を集め始める。

そして手に集めた光を相手のモンスターへと放つ。

……盛り上がってる中言いたくはないけど、完璧にかめめ波でした。

「では、ありがとうございます」

呆然としている試験官を放っておき、上へと戻った。

1ターンキルしちまったなあ……。

一話 気がつけば(後書き)

皆様の感想を心からお待ちしております。

一話 色々あっても頑張る俺（前書き）

タイトル、ゴロは悪いわテキトーすぎるわ最悪ですね。

次回から現実が忙しくなるので、かなり遅れることだと思います。

二話 色々あっても頑張る俺

とりあえず上へ帰ると、いつぞやの不良がまだ蔓延はつっていた。

しかもこちらを凝視して。

「おいおいおい。お前いつの間にあんなカード手に入れたんだ？

お前じゃ使いこなせねえだろうしオレに譲れよ」

「ここはさっさと渡した方が身の為だぜ？ 試験の日に怪我なんか作りたくねえだろ？」

おいおいおい。こいつらは俺の決闘を見ていなかったのか？
まあ確かに手札が良かっただけかもしれないけどさ。

「つか本気で邪魔。こっちは上で入学者がどの位のレベルか観察したいのだが。」

「そんなにカードが欲しいのか？ ……だったら、はい。『デス・メテオ』」

「ぶざけてんのか！？ こんな屑カード

」

「いやいや。意外と使えるんだぜ？ そのカード」

嘘だが。

にしてもホントにカードが欲しいだけみたいだ。

自分の中では遊戯王は遊びという思いがまだ残っているから、カード一枚に何をそんなに熱くなっているのか分からない。

「どこがだ！ LP3000以下だったら使えねえカードだろうが！ そんなのすぐに削れる！」

「しかしなあ。そのカード、手札のコストとしても使えるんだぜ？

お前らにはないのか？ 手札捨てることによって発動する効果でどれを捨てようか悩んだことが。」

捨てたカードが後々役に立っていたのにと後悔したことが」

「ぐ……」

あるみたいだ。

よし。ここで一気にたたみこめばもう邪魔はしてこないであろう。多分、おそろく、きつと。

「しかもよく考えてみ？ 1000ポイントも削れるんだぜ？」

戦闘ダメージが0になるモンスターやカードを出してきても、そのカードだけで1000ポイントだぜ？

……………まあどうしてもいらないうてんなら

「貰っておこう」

「はい、まいど〜」

不良たちは満足したのか去って行った。

さようならーもう二度と現れるなーというか試験落ちろー。

……………ここに突っ立っていても何も始まらないし迷惑になるだけだ。

とりあえず、テキト に席を見つけて観戦でもしておこう。

〜@〜

くう……………すぴー……………かあ……………すぴー……………むい……………すかー……………はっ！？

「寝過ごしたあああああ!!」

「うおっ！ 起きたのか？」

「……………ああ、そうだった」

思い出した。途中までは見ていたものの、あまり白熱したものがなかったから眠ったんだった。

そうだ。白熱していなかったからなのである。

けっして、ホログラム映像の昆虫族が気持ち悪くて、気を失ったわけではないのである。

ニードルワームとか見ていないのだ。

断っじて！ 見ていないのである！

「大丈夫か？ なんだか顔色が悪そうに見えるが……………」

「ああ大丈夫だ……………ありがとう……………」

「そういえば君。1ターンキルしていなかったか？」

「あん？」

今になってようやく隣にいる人物の顔を見ることができた。

うげっ！ こいつは……。

「あ、ああ。確かにそうだが」

「そうか。オレはその時決闘していたから見ることは出来なかったんだ。惜しいことをした」

まあそうだろうなあ。だってこいつ一番だったはずだからなあ。

「オレの名前は三沢 大地だ。お前は？」

はあ……原作キャラに合う確率が高まってきている。

つまりは俺の命に……『平杉 椋』の命に関わる事件が起こるかもしれないってことだ。

「俺は『平杉 椋』。よろしく」

「ああ、こちらこそよろしく頼む。

そうだ、椋のデッキを見せてもらってもいいか？ どんなデッキで勝ったのか気になる」

「ああ、いいぜ……っと」

俺の足元に置いてあるカバンを持ち上げ、デュエルディスクを取り出して三沢に渡した。

三沢は、ほう……とか、ふむ……とか言っている。

……我は暇なり。

「おい三沢。俺ちょっと寝るから終わったら起こしてくれ……」

「なるほど……」

聞いているのか？ まあいい、取り敢えず寝る。思考力が低下している。おやすみ。

〜@〜

「スカイスクレイパーシュート！」

「ほう……結構やるな、あの110番。お前もそう思わないか、って、寝てたな……」

「う……なんだ？……騒々しいぞ……」

「おい！ 見てたか俺の決闘！」

横に三沢がいる。後ろに水色の小さな男がいる。活発そうな男がこちらに走ってきた。観客は盛り上がっている。

どういう状況？

「三沢。説明求ム」

「ああ、こっちに走ってきているやつは試験終了時間ギリギリでやってきてな。」

それに怒ったクロノス教諭が自ら出てきて決闘したんだが、あいつが勝ったんだ。

名前は遊戯 十代というらしい」

「見たか、俺の決闘！ まさか実技担当の先生に決闘してもらえろとは思わなかったぜ！」

ああ思い出した思い出した。うんうん……………俺の立場ヤバくね？

なんか十代がこっち向いてる。やはり自己紹介した方がいいか…………

やだな……。

「ああー……（したくないけど）初めまして。俺は平杉 椛という」

「おう、俺は遊戯 十代！ デュエルアカデミア一番の男さ！」

これぐらいでいいだろう。この様子じゃ俺が1ターンキルしたことを知らないみたいだし。

こいつに1ターンキルしましたー、なんて言ってみろよ。

すぐに、デュエルしようぜ！ とか言ってくるに違いない。

まあ伝わってないのはいいこと

「ああ、そういえば椛は1ターンキ」

「三沢貴様あああああああ！」

「ぐわ！ ちょ、おまつ、いきなり、何を、くっ、首が、絞まる……」

なんてことを言い出すんだこいつは！

とりあえず三沢を十代とは離れた場所に連れていく。危険因子の捕獲に成功しました。

「いきなり何をする！」

「あのな……ひとつ言っておく。あいつに俺が1ターンキルしたことは黙っている」

「な、なんでだ？」

「なぜかって？ あいつ見てりゃ分かるが、決闘バカだろ？」

「ああそうだな」

落ち着いたを取り戻し、冷静になる三沢。

「そんな奴に『1ターンキルしました』なんて言ってみ？」

すぐに、決闘しようぜ！ とか言い出すだろっ」

「それはいいことなんじゃないのか？ 決闘すれば相手のデッキが分かるし、実力も」

「俺が言いたいのはそういうことじゃない」

「何？」

俺の言うことが理解できないのか、訝しげな顔になる三沢。

あんまり関わりたくないってのもあるが、もう一つの理由が……

「俺はな、ヒーローデッキが苦手なんだよ……」

そう。俺は本当にヒーローデッキが苦手なのだ。

E・HEROを始めとし、D・HERO、E・HEROなどが途轍もなく苦手なのである。

まだカードを大して持っていない頃、それでも悪魔族やアンデット族を集めていた。

そこでイベントが起き、HEROデッキの十代と決闘することになった。

結果は惨敗。

悪は正義に勝てないらしい。

まあそんな黒歴史は置いておき。

「理由は言えないが、頼む……!!」

「……そこまで言われちゃ、言えるわけないだろう」

「おお……!! ありがたや、ありがたや!!」

いや、本当に助かる。

こんな良く分からないデッキで戦うとなったら不安だからなあ。

「それじゃあ戻るか」

「ああ、そうだな」

もう行っちゃったかね、十代達。

おお、まだいた。

すまんね、待たせちゃって。

「桜！ 俺と決闘しようぜ！」

.....今、なんと言った？

一話 色々あっても頑張る俺（後書き）

なにか感想があればぜひ書き込んでくださいますしー。

三話 重大……じゃない、十代と決闘+@（前書き）

ああ、今回は酷いかもしれませんね。暗い、何せ終わりが暗い。

失礼、今回も、でしたね。

三話 重大……じゃない、十代と決闘+@

「ここ、デュエルアカデミアでは」

いやあ、校長先生のお話「長いで括れる世界になってきているんじゃないか？」

ホント長いわ、うんマジで。

はあ、この話が終わったら十代と決闘かあ……。

『え……なんで急に？』

『だってお前試験で1ターンキルしたんだろ？ 翔が言ってたぞ』

『……しまった……！ 翔の存在を忘れていた……！』

『なー決闘しようぜーいいだろー？ なーなー』

『離さんか！』

『なーなーなーなーなー』

『ええい触るな！　そもそも今は無理だろうが！』

『つまり入学したらいいってことだな？　待ってるぜ〜！』

『あ！　おい、待て！　……くそッ！』

この体が『俺』なら無視して寝ていてもいいんだが、『平杉 椋』
のだからなあ。

……面倒だ………。

しかも、言いたくないことなのだが………　未だに原作主人公達
としか友人がいない。

どうやらこの体の持ち主はデュエルがとても弱く、そのくせ勉強だ
けが出来る人間だったらしい。

体力もないようで、すぐにバテる。

さらに言うなれば、中学時代すんげえ暗い雰囲気放っていたよう
だ。

おかげで同じ中学校だったやつから「あいつは暗い」と話されてい
る様子。

……まあ俺もそんな奴とは近づきたくないけどさ。

校長先生の話が終わったようだ。

いやだなあ……。このデッキで勝てる気がしないんだよなあ……。

〜@〜

そんなこんなで今はレッド寮にきています。

俺は当然のごとくラー・イエロー。

うう……。十代達がきた……。放棄しても良かったのに……。

「待たせたな！ よろしく頼むぜ！」

「あーこちらこそ。始めましょーか」

そついい、カバンからデュエルディスクを取り出し、デッキを装着。

ああ、デッキ調整してなかった。

負ける確率がググンと上がった！ やる気がとてつもなく下がった！

「決闘！」……デュエル」

取り敢えず五枚引いて……て……え？

バーンデッキじゃない……だと!?

「先行は俺がもらっぜ！ ドロー！

手札からE・HERO スパークマンを攻撃表示で召喚！

カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

ちょ……予想外すぎるんだが……なぜこんなデッキに……。

最新のカードが入ってるのか？……ゲームオリジナルはどうだろう。

「俺のターンドロー。」

魔法カード『おとり人形』発動。

裏側表示の罨カード1枚を強制発動させる。

んでもって発動タイミングが正しくない場合その効果を無効にして破壊」

えーっと何々……ヒーロー・シグナルなので破壊」

「ああ！？ ヒーロー・シグナルが！」

「さらに発動後このカードは墓地へは行かず、デッキに戻る」

「何だつて!?!」

永続罨や魔法だったら意味がないんだけどな。

全てではないが。

「んでモンスターをセット。

カードを2枚セット。

ターンエンド」

「ドロー！」

いくぜ、権！」

こないてください。

「E・HERO クレイマンを攻撃表示で召喚！」

そして手札から『融合』発動！

E・HERO スパークマンとE・HERO クレイマンを墓地に送り、

現れる！ E・HERO サンダー・ジャイアント！」

「おー……」

「バトルフェイズだ！」

行け！ 椋のモンスターに攻撃！」

なんで通常召喚したんだろう。

というか十代は罨カードとか気にしないのか？

よく今まで負けなかったな……あ、そうか。チートドローか。

「攻撃されたのは、スフィア・ボム 球体時限爆弾。

モンスター効果。

裏守備表示のこのカードを相手モンスターが攻撃した時、

このカードは攻撃モンスターの装備カードになる」

「くっ……」。

俺はターンを終了するぜ」

これって相手のモンスターの効果って見れないんだっけか？
要するに知識ないと不利ってわけね。

「俺のターンドロー」。

あー……手札からライオウを攻撃表示で召喚。

ターンエンド」

かなり微妙な手札だなあ。

というかこのデッキ自体が微妙なのか？

「俺のターン、ドロー！……よし！」

む、何かいいカードを引いたようだ。

今は取り敢えず……

「スファイア・ボム 球体時限爆弾の効果、発動。

次の相手ターンのスタンバイフェイズ……今だな……に、このカードと装備モンスターを破壊する」

「何だつて!? それじゃあサンダー・ジャイアントは……」

「そ、破壊。

さらに、その時、装備モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。

ほれほれ」

「ぐわあああああ!」

サンダー・ジャイアントの背中に乗っていたボムが爆発し、爆風が十代を襲った。

……… ホントに、闇のゲームじゃないよな?

つて、なんか十代さんめっちゃ笑ってるー! 怖ええええええ!

爆風受けて笑ってるって……… 正気じゃねえぞ!?

「ふ……… あっはっはっはっは! やっぱ強いな、椀!

さすが1ターンキルしただけはあるぜ!」

このデッキじゃないけどね。

「だが俺はその上をいく！ 手札から『強欲な壺』を発動！
カードを二枚ドロ―！」

さっき引いたのはこのカードだったのか？

手札が3枚から5枚に増えたな。

バブルマンが来てもこっちには対策が

「手札からE・HERO バブルマンを特殊召喚！

モンスター効果発動「甘いぞ遊戯！」何!？」

甘い、甘すぎるわ！

綿菓子と金平糖と水あめを一気に食べたぐらい甘いわ！

……っわ、マジで口の中が甘ったるくなってきた。

「リバーズカードオープン。『天罰』発動。

手札を1枚捨てて効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する」

「な、バブルマンが！」

空から雷がバブルマンへ落ち、そこにはバブルマンの丸焼きが

見なかったことにしよう。

「だがまだいける！」

手札から融合を発動！ E・HEROフェザーマンとE・HEROバースト・レディを融合！

マイフェイバリットカード、E・HERO フレイムウィングマンを召喚！」

「もう少し知識を蓄えた方がいいと思うんだぜ、十代」

といってもこの時代に有ったかは知らないが。

「リバースカードオープン。王宮の弾圧、発動。

800ライフポイント払ってモンスターの特殊召喚及び

モンスターの特殊召喚を含む効果を無効にし破壊する。

「そんじゃま、払いますわ800ポイント」

「げっ！ それじゃあフレイムウィングマンは……」

「その通り。破壊だ」

「わらわらと人？が集まりフレイムウィングマンを取り押さえて、持っていた武器で一突きに

「私は何も見ていない。」

「俺はこのターン何にも出来ない……」

「おい十代」

「何？」

「お前の残りライフはあと1400だ。」

「そこで俺が攻撃力1400のモンスター引いたら面白いよなあ？」

「ちょっとした名言パクらせていただく。」

「まあそんなことしなくても勝てるんだが、なんとなく言ってみるか」

った。

俺の運は……どうだ!?

「ドロー!」

……ライオウを、召喚

「」「」

ライオウ ATK1900

「ダイレクト攻撃」

「ぐわああああ!」

それでも乗ってくれる十代に感謝。

〜@〜

楽しかったぜーまたやるうなーなどのたまう十代と別れ、自分の寮へと帰った。

先ほどのデッキはあまりにおかしい。

絶対とは言い切れないが、バーンデッキではないような気がする。
手札にもやたらめったら無効が多かったし。

「取り敢えずデッキ確認っと」

5分後……

「意味わかんね……」

調べてみた結果。

試験の時に使ったデッキではなかった。

デッキの出来が悪すぎた。

やはり無効デッキだった、しかし中途半端。

以上。

「……どういふこと？」

なぜデッキが変わったのか。考えられる可能性としては二つ。

？俺が寝ている間に三沢に取られた。

？俺が寝ている間に誰かに変えられた。

？全てはファンタジーだからさ！

まず？だが……それはないだろう。三沢はこの学園でも数少ない常識人のはずだ。なにか欲しいカードがあったとしても取るまでには至らないだろう。

そして……。確かにありそうだが、隣に三沢がいたんだぞ？ しかもわざわざデツキを入れるか？普通。

最後に……。……意外とバカにははいけないかもしれない。なにせカードだけで世界を手に入れることが出来るんだから。

「しっかし……考えれば考えるほどワケわからんなあ……」

そもそもこんなところに自分がいること自体が理解不能なのだ。

なぜ自分はこんなところにいるのか、とか。

元々あった平杉 椛の人格はどうなったのか、とか。

この体の家族構成はどうなっているのか、とか。

このままだと原作に影響しないか、とか。

元の世界の自分はどうなっているのか、とか。

本当にここはアニメの世界なのか、とか。

考えれば考えるほど頭の中が疑問だらけになり、正しい思考に行きつくまでに新たな疑問が浮かびあがる。

もしかするとあの時電車が事故に遭い、今自分が見ているのは全て空想なのではないか。

もしかするとこういう場所が本当にあっただのではないか。

もしかすると俺は元々ここに住んでいたのではないか。

もしかすると俺が覚えている記憶こそが空想

「いかなな、ちょっと疲れているようだ」

頭を振り、今さっきまで頭を悩ませていた疑問を振り払う。

人間理解できないことが立て続けに起こると、普段考えもしない事を考え出すものだ。

……結論は出ないとわかっているのに。

「はあ……取り敢えず一風呂浴びてくるかね。気分を落ちつけねえとな」

そう、自分は目の前にある問題から解いていけばいいのだ。

いくら先を読んだって分からない。

解いている途中にふと気づくこともある。

今自分に出来ることは目の前の道を進むだけだ。

……まずは、この空腹をどうにかしようか。

三話 重大……じゃない、十代と決闘+@（後書き）

次回からは明るくいきたいと思います。

なにか気になる点でもございましたら、どうぞお気軽に感想板にお書き込みください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1588p/>

俺の楽しい決闘道

2010年12月10日19時25分発行